

2018年度

慶應義塾大学入学試験問題

環境情報学部

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
2. この問題冊子は、表紙を含めて16ページあります（問題は3ページから15ページ）。
試験開始の合図とともに全てのページが揃っているか確認してください。
ページが抜けていたり、重複したりしている場合には、直ちに監督者に申し出てください。
3. 問題冊子は、試験終了後に必ず持ち帰ってください。
4. 受験番号と氏名は、解答用紙の所定の欄に必ず記入してください。

慶應義塾大学環境情報学部は、自分が心から好きで面白いと感じていることを研究し、人間の新しい未来をその研究によってみずから切り開きたいという熱意を持った学生を求めています。そのような思いを実現するには、まずは確かな基礎知識を身に着けることが大切です。しかし、それだけでは不十分です。これまでにないビジョンやコンセプトを創り出す力が必要です。さらに、研究成果を用いて人々や社会を動かすためには、ものごとを想像する力や自分が持っているイメージを他人に的確に伝える能力も必要です。

以上のことを理解した上で、次のページから提示されている四つの資料に目を通してください。それぞれの資料はタイトル、物語の一場面を描写した短い文、絵から構成されています。資料4には詳細な物語もついています。これは資料4のタイトルと短い文、絵をもとにして、ある作家が創作した物語です。

これら四つの資料について、以下の三つの問いに答えてください。

問題1

資料1～3の中で、あなたが一番興味深いと感じた資料はどれですか。その資料の番号に○をつけてください(解答欄1)。ただし、資料4は問題2のための参考資料ですから、選べません。もし興味深いと感じた資料がなかった場合には、5に○をつけてください。

問題2

あなたが問題1で選んだ資料をもとに物語を創作し、解答欄2-1にかいてください。物語の創作においては、あなたが選んだ資料のタイトル、短い文、そして絵が表している世界観を大切にしてください。あなたが資料から読み取って想像した世界を、読者が納得する筋書きに仕立ててください。その際、資料4に含まれている物語を参考にしてかまいません。なお、解答欄2-1の詳細な物語の中に、あなたが選んだ資料に記されている短い文を必ず全て含めてください。その短い文に必ず下線を引いてください。

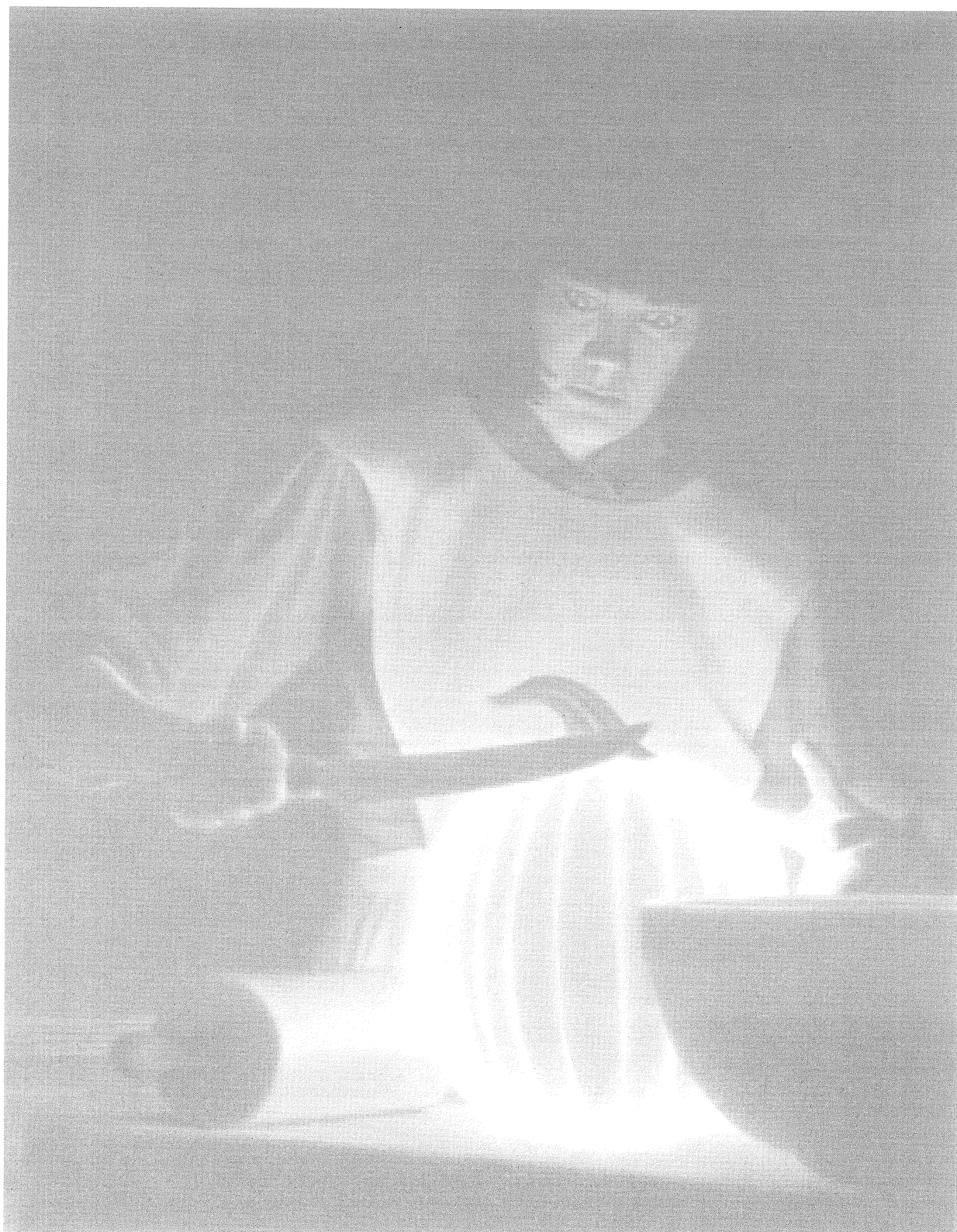
もし問題1で選んだ番号が5である場合(資料1～3に興味深いと感じた資料がなかった場合)には、資料1～3と同じ様式で、あなたが独自に考えたタイトル、短い文を解答欄2-2に記し、絵は解答欄2-3にかいてください。さらに、詳細な物語を解答欄2-1にかいてください。なお、詳細な物語の中に、解答欄2-2に記した短い文を必ず全て含めてください。その短い文に必ず下線を引いてください。

問題3

あなたが問題2で創作した物語を通して、あなたが読み手に最も強く伝えたいメッセージは何ですか。解答欄3に200字以内で簡潔に説明してください。

そんなことやっちゃいけない

彼女がナイフを入れていくと、
なんとそれはますます明るさを増していった。

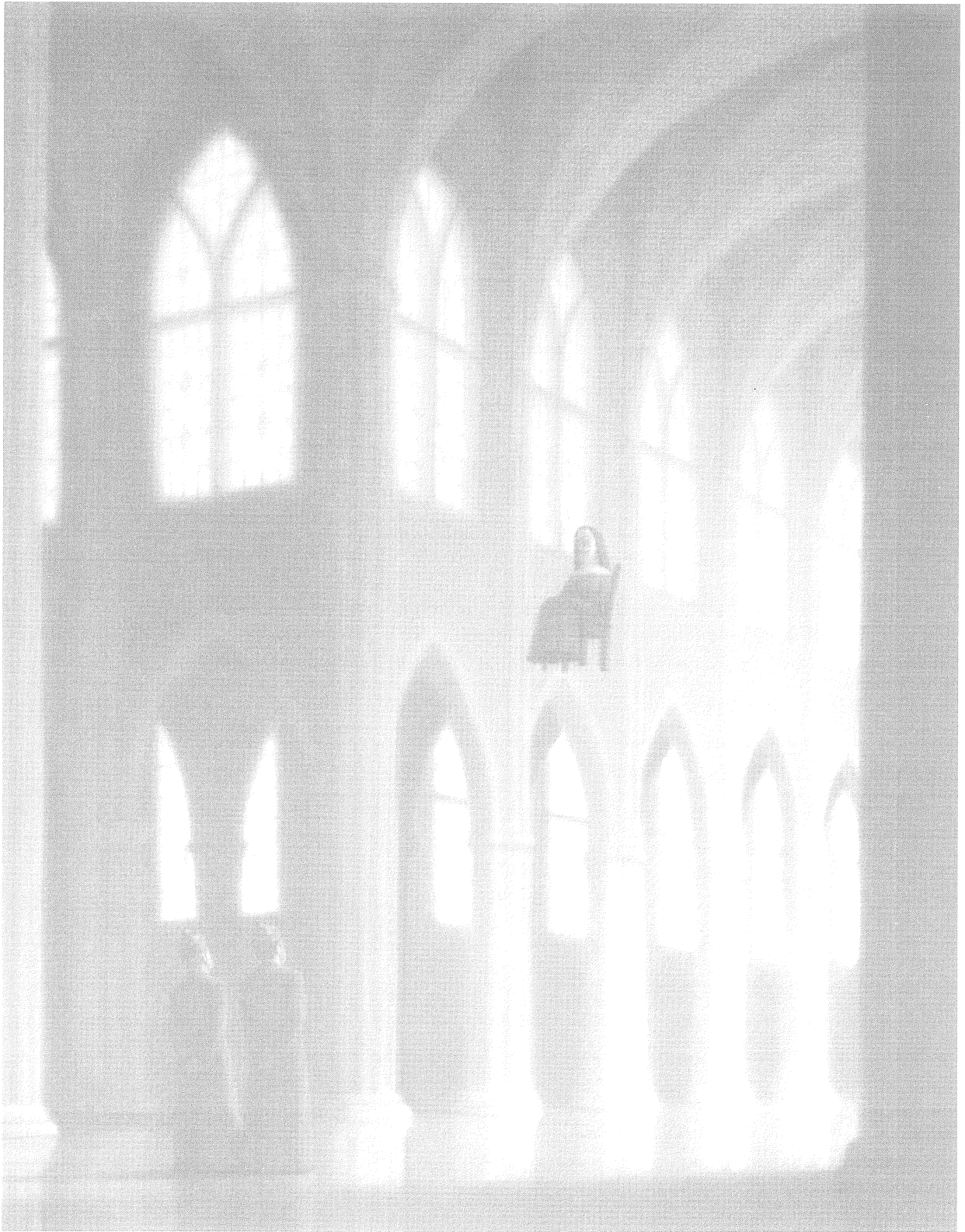


出典

C・V・オールズバーグ（村上春樹 訳）、『ハリス・バーディックの謎』、河出書房新社、2015

七つの椅子

五つめは結局フランスで見つかった。



出典

C・V・オールズバーグ（村上春樹 訳）、『ハリス・バーディックの謎』、河出書房新社、2015

絨毯の下に

二週間後にまたそれが起こった。



出典

C・V・オールズバーグ（村上春樹 訳）、『ハリス・バーディックの謎』、河出書房新社、2015

オスカーとアルフONS

それらを返さなくてはならない時が来たことは
彼女にもわかっていた。
毛虫たちは彼女の手の中でもぞもぞとうごめき、
「サヨナラ」という字を描いた。



「ファルカス予想」とは、いまだ証明されていない定理のなかでも最高峰のエベレスト山なの
だと言ってもいいが、エベレスト山が数え切れないほど登頂されているのに対し、「ファルカス
予想」の頂上に近づいたものはいまだかつて存在しない。

<中略>

「ファルカス予想」の秘められた力を心から信じて身を捧げた者のなかに、十三歳のアリス・
ランドルフの父親がいた。ジュリアス・ランドルフ博士は世界的な物理学の権威であり、その
強迫観念、いわゆる「ファルカス熱」を家族ぐるみの使命に変えていた。彼はアリスの三人の
兄たちをそれぞれ大学に送り、数学や物理学の博士号を取得させた。そして、毎年夏になると、
実家に息子たちを呼び戻した。四人は黒板がずらりと並ぶ教授の書斎に何時間もこもり、扉を
開けるのは、アリスの母親が淹れたコーヒーポットを受け取るか、休みない計算によって生じ
たチョークの粉の雲を外に出すときだけだった。

ランドルフ教授は娘にも兄たちと同じ道を歩ませようとしていたが、娘は「数学向きの頭」
の持ち主ではなかった。彼女を心から惹きつけたものとは、父親に言わせれば「自然との対話」
だった。

それは本当のことだった。その年齢の子どもにしては珍しく、アリスは一人で長時間過ごす
ことを好み、裏庭の木にもたれて座り、遠くをじっと眺めているか、昔からのランドルフ家の
裏手にある森を歩き回っていた。

そうした散歩をしていたあるとき、アリスは家の近くの森を流れる小さな川のそばにさしか
かった。鳥が一羽、水の流れに運ばれていく一枚の葉のすぐ上を飛び回っているのに彼女は気
づいた。その葉の上には、二匹の毛虫がどうにか落ちずに乗っていた。アリスは水際に膝をつ
き、鳥を追い払うと、濡れてけばだった毛虫たちを救い出した。

彼女は日の当たる岩の上にその二匹を置いた。体が乾くと、毛虫たちはすぐに動き始めた。
彼女がじっと見つめていると、毛虫たちは体の向きを変え、「ア」という文字を描いた。「不思議
ね」とアリスは心の中で思った。すると二匹はまた体をよじり、今度は「リ」を作った。そ
の次に「ガ」、そして「ト」と続き、最後には「アリガトウ」ができた。

<中略>

アリスは家に走っていき、空になった広口のガラス瓶を一つ見つけた。その蓋にいくつか穴
を開けると、岩のところに急いで戻った。新しい友達はまだそこにいた。彼女は瓶に葉を詰め
ると、岩に斜めに立てかけた。「ここなら安全よ」と二匹に言った。一匹目が体をくねらせつつ
瓶に入ると、「あなたはオスカーって名前にするわ」とアリスは言った。仲間も入ると、「あな
たはアルフォンスね」と言った。

文字を作る毛虫たちを家族に見せるのだと思うと、アリスは胸が躍った。父と兄たちが必死
に問題に取り組んでいることはわかっていたが、きっとオスカーとアルフォンスに会いたがる
はずだ。

彼女が書斎に入ると、邪魔されて男たちが苛立っているのがわかった。「でも見てよ！　すご
いんだから」と彼女は言った。男たちが周りに集まると、アリスは瓶を開けた。

「なんだよ、ただの毛虫二匹じゃないか」と兄の一人が言った。「待って、ちょっと待ってて」

とアリスは彼らに言った。

オスカーとアルフォンスは瓶から出てくると、等式や計算式がところ狭しと書かれた紙に覆われた作業台に乗った。毛虫たちが動かなくなると、アリスは「ほら、何か描いてみて。ここにちはって言って」と声をかけた。指で軽くつついてみたが、二匹は黒板の方に頭を上げるくらいで、あとはじっとしていた。アリスは顔を上げて兄たちを見たが、父はすでにそっぽを向き、チョークを持って計算を再開していた。

「この子たち文字を作れるの。本当にできるのよ。私が外で見たんだから」

「そうか、じゃあ外に戻してあげたらいい」と一番上の兄が言った。彼は毛虫たちが乗った紙を持ち上げると、二匹を滑らせて瓶に戻した。「気をつけてよ!」とアリスは言い、瓶をつかんだ。

<中略>

書斎に戻ると、彼女は瓶の蓋を開けた。オスカーとアルフォンスはよじ登って出てきた。「どうして私が紹介したときに何も言わなかったの?」と言うと、毛虫たちは「ゴメントテモハズカシクテ」と文字を作った。そして小さな頭をまた上げると、黒板をじっと見た。そこには等式や注解がびっしりと書き込まれていた。オスカーとアルフォンスはそれを頭に刻み込みつつ、体を揺すっているようだった。ついに二匹は体をよじって「ワカル」という文字を描いた。「わかるって何が?」とアリスは訊ねた。「コタエ」が二匹の返事だった。

アリスは黒板を、そしてオスカーとアルフォンスを見た。「あれの答え?」と、訝しげな口調で訊ねた。

毛虫たちは動き始めた。「ヨクミテ」と文字を作った。アリスは鉛筆と紙を手にとった。ゆっくりとオスカーとアルフォンスが描き始めたのは、黒板に書かれた奇妙な符号や記号と同じものだった。彼女は忠実に、丁寧に一つ一つ書き留めていき、やがて四枚の紙がすっかり埋まった。

毛虫たちの動きは止まった。「これでおしまい?」とアリスは訊ねた。「マダ」と二匹は答えた。「トテモツカレタトテモオナカスイタ」アリスの手助けで瓶に戻ると、毛虫たちはすぐに葉をかじり始めた。瓶に入れた葉はもうほとんど食べてしまっていたので、アリスはもっと葉を取ろうと瓶を持って外に出ると、二匹が体を乾かした岩のところに戻った。彼女は岩の上に葉を積んだ。オスカーとアルフォンスはそれを満足げに頬張った。一口ごとに毛虫たちの体が大きくなっていくようにアリスには思えた。

符号や記号や数字を書くことで人が疲れるとは考えづらいだろうが、アリスも毛虫たちと同じくらい疲れ切ってしまい、二匹と一緒にぐっすりと眠り込んだ。彼女の名前を呼ぶ声が聞こえてようやく、アリスは目を覚ました。

<中略>

アリスが森から出て家の裏庭に入ったとき、二人の兄が口の横に両手を当てて彼女を呼んでいるのが見えた。妹の姿を目にすると、二人は興奮して駆け寄ってきた。兄たちの口からは、「天才的な閃き」や「度肝を抜かれた」、「宇宙の本質を見抜いた」といった言葉が次々に溢れてきた。二人が彼女を書斎に引っ張っていくと、ちょうどもう一人の兄と父が、オスカーとア

ルフォンスの文字をアリスが書き留めたメモを黒板に写し終えたところだった。

アリスが部屋に入ると、父は振り向いた。彼はメモを掲げた。目は涙で潤んでいるようだった。「アリス、アリス、どうして私たちに言ってくれなかった？」と彼は言った。「言うって何を？」と彼女は訊ねた。「つまりお前が……」と父は言い淀み、しばらく言葉を見つけれずにいた。「つまりお前が知っていて、ずっと私たちと一緒に取り組んでいたのに、一言も言ってくれなかったことだ」彼は紙を高く掲げた。「これは天才の偉業だ」

兄の一人がアリスの両肩をつかみ、まじまじと彼女の目を見つめた。「これは僕らが見つけ出そうとずっと苦勞していた手法だ。これで、かつてないくらい解決に近づける。誰よりも近くに。どうやってこれを解明した？」

アリスは自分がしてもいいことで褒められるのが嫌になってきた。「私じゃないわ」と彼女は答えると、オスカーとアルフォンスの入った瓶を上げた。「この二匹よ。この子たちが作った文字を、私が書き留めたの」男たちは無言だった。一家で最年少のアリスが、今まで出会ったなかでもずば抜けた頭脳の持ち主だということを喜ぶべきなのか、それとも毛虫と話ができると信じているらしいことを心配すべきなのか、彼らにはわからなかった。

だが、父には一つ確信していることがあった。アリスのもたらした進歩と計算は驚くべきものではあったが、予想を証明する直前で止まっており、あといくつかの段階を経なければならぬ。生きている間にはそれは終わらないかもしれない。

もし毛虫が問題を解いているというふりをさせておけば、アリスがそのまま続けてくれるのなら、彼としては構わなかった。彼はずっと変人や奇人の科学者たちに囲まれて生きてきた。彼らをどう扱えばいいのかは心得ていた。そこで彼は穏やかに娘に歩み寄ると、彼女の友達は最後まで計算をする気があるだろうかと訊ねた。アリスは瓶を覗き込んだ。たらふく食べた毛虫たちはぐっすりと眠っていた。

「今は疲れちゃってると思う。でも明日やってみる」と彼女が言うと、父親は頷いた。兄たちも調子を合わせ、それはいい考えだと口を揃えて言った。

アリスはオスカーとアルフォンスの入った瓶を持って二階の部屋に上がった。後で母が料理をお盆に載せて持ってくると、父と兄たちがどれほど誇らしく思っているかを伝えた。

アリスは翌朝早くに目を覚ました。彼女は瓶を覗き込んだ。オスカーとアルフォンスは葉をすべて食べ尽くし、瓶の底で安らかに横になっていた。少し新鮮な空気が欲しいかと思い、彼女は服を着替えると外に出て、最初に毛虫たちと出会った岩のところに行った。彼女は瓶の蓋を開け、毛虫たちを片手の上に乗せた。ほんの一日世話をしただけで、どれほど体が大きくなったのかが見て取れた。二匹はすぐにでも蛹を作り、定められたもの、つまりは蝶になる準備ができていた。それらを返さなくてはならない時が来たことは彼女にもわかっていた。毛虫たちは彼女の手の中でもぞもぞとうごめき、「サヨナラ」という字を描いた。彼女は小さな木の樹皮に二匹を乗せてやると、ゆっくりと登って消えていく姿を見守った。

出典

C・V・オールズバーグ（藤井光 訳）「オスカーとアルフォンス」〔C・V・オールズバーグ ほか
（村上春樹 ほか 訳）『ハリス・バーディック年代記 - 14 のものすごいものがたり』、河出書
房新社、2015 所収〕
（一部編集・改変）

